

# フィリピンへのスペイン文化の移入についての予備的考察

井上 幸孝

## はじめに

本稿は、スペインによるフィリピン征服および支配の概要を見るとともに、フィリピンへのスペイン文化の移入について、これまでの研究や調査で得られた知見に基づいて小考するものである。以下、1.ではスペインによるフィリピン征服の経緯をまとめ、2.でフィリピン先住民に対するスペイン支配の概要を記述した上で、同地のキリスト教化の特徴について考える。その後、3.では、とりわけ語彙の問題を取り上げながら、スペインの文化要素がどのようにフィリピンへ伝わったのかを研究する上で有効となり得る見方を提示することとしたい。

## 1. フィリピンの征服と植民地化の開始

### (1) 初期の探検航海

フィリピンは 16 世紀後半にスペインによって征服された。イギリスによる短い占領期（1762～64 年）やイスラーム勢力の長期にわたる抵抗を抱えた地域もあったものの、基本的には 1898 年まで 3 世紀以上にわたってフィリピンはスペインの海外領であり続けた。スペイン人が征服を進めたのは 1565 年以降のことだったが、フィリピンとスペインの最初の接触は、これよりも 40 年以上前のマガリャンイス Fernão de Magalhães（マゼラン、スペイン語ではマガジャネス Fernando de Magallanes）の航海にさかのぼる。

マガリャンイスのトリニダー号を含む 5 隻の船団は、1519 年にスペイン南部を出航し、カナリア諸島を経由した後、南米大陸の南側を廻って「南の海」（太平洋）<sup>1</sup> に達し、これを横断した。長い航海の末にマリアナ諸島などを経てマガリャンイス一行がビサヤ諸島に達したのは、1520 年のことであった。マガリャンイス自身は、セブ島近くのマクタン島でのラブラブとの戦いで一命を落とすが、エルカーノ Juan Sebastián Elcano 率いる一部の乗組員はアフリカ沿岸経由で 1521 年にヨーロッパに戻り、「世界周航」を達成した<sup>2</sup>。

このマガリャンイスの航海は、アメリカ大陸でアステカ王国の征服（1519～21 年）が展開したのとまさしく同時期の出来事であった。1492 年のコロン（コロンブス）によるカリブ海域への最初の到達、1510 年のダリエン創設によるカステーリャ・デ・オロ地方への探検・入植、

上述のアステカ王国征服、1530年代前半のインカ帝国征服といったスペインの海外における探検や征服が一気に加速した流れの中で、スペインが送り込んだ探検隊がフィリピン諸島へも到達した。

マガリャンイスによるこれら諸島の「発見」以降も、スペインは複数の探検隊を派遣した。1525～36年のロアイーサ García Jofre de Loaísa、1527～29年のサアベドラ・セロン Álvaro de Saavedra Cerón、1542～43年のロペス・デ・ビジャロボス Ruy López de Villalobos の遠征隊が送り込まれ、それぞれ太平洋を東から西へ横断している<sup>3</sup>。しかし、いずれの探検についても、太平洋航路の復路を見出すという目的が果たされることはなかった（菅谷 1995：205）。この間、スペイン王室とポルトガル王室は 1529 年にサラゴサ条約を結んでいるが、これはスペインが当初に企図していた香料諸島（モルッカ諸島）進出をいったん断念し、フィリピン諸島をアジア進出の拠点として維持する方針へ転換したことを意味していた（菅谷 2001a：121）。

## （2）フィリピンの征服

1564 年 11 月にメキシコを出航したロペス・デ・レガスピ Miguel López de Legazpi（以下、レガスピ）は、3 か月を超える太平洋横断航海の末、マリアナ諸島<sup>4</sup>に達し、サマール島やレイテ島を経由してセブ島に到達した（図 1）。この遠征隊は、1565 年 4 月、かつてマガリャンイスが遭遇したラジャ・フマボンの息子ラジャ・トゥパスが治めていたセブを征服し、最初のスペイン

植民居留地であるサン・ミゲル町 Villa de San Miguel を建設した<sup>5</sup>。同年 6 月にレガスピは、孫のサルセード Felipe de Salcedo を隊長とし、アウグスティヌス会士で航海士のウルダネータ Andrés de Urdaneta<sup>6</sup>を同行させてメキシコへの「帰路」の探検に向かわせた。この探検隊はこの年の 10 月に無事にアカプルコに達した（Laorden 2013: 99；図 2）。太平洋を西から東へと横断する航路が見つかったことで、スペインによるフィリピンの植民地支配が可能となった<sup>7</sup>。

その後、スペイン人の根拠地はセブ島からパナイ島に移されたが、まもなく彼らはルソン島へと進出した。セブのスペイン人は 1565 年の時点でルソン島から来た商人と接触しており、同地の豊かさについての情報を得ていた（Corpuz 2005：51）。現地の者を



図 1：マニラ市内のレガスピとウルダネータの像（2015 年 2 月、筆者撮影）。



図2：現在のアカプルコ湾（2015年8月、筆者撮影）。

案内人として、彼らはルソン島に達し、新たな根拠地を建設することとなる。

1570年にスペイン人が到来した当時、マイニラ（マニラ）<sup>8</sup>とその周辺には現地の支配に関係する3人の主要人物がいた。後のイントラムロス付近はアチェ（ラジャ・マタンダ）が支配していた<sup>9</sup>。この人物の後継者に指名されていたのは、甥のラジャ・ソリマンであった。一方、パシグ川を挟んで北側に位置するトンドは、アチェのいところであったバナウ・ラカンドゥーラが支配し、中国（福建）商人との交易を独占していた（Scott 1994: 192）。

1571年5月、レガスピ率いる軍はラジャ・ソリマンを敗退させ、同年6月にマニラ市を創設した。これによりマニラはスペインによる支配の中心地となった。メキシコ太平洋岸のアカプルコと結ばれたガレオン貿易は、アジア側の唯一の出入口をマニラとして、1815年まで続くこととなった。

マニラは城壁都市として整備され、壁で囲まれた市街域はイントラムロス *intramuros* と呼ばれた（図3）<sup>10</sup>。1580年代半ば以降、城壁の建造や建物の石造化が進み、植民都市としての空間が整備された。総督府や大聖堂などの主要建造物、各修道会の教会（例えばアウグスティヌス会のサン・アグスティン教会）等はこのイントラムロスの中に建てられ、その北西端にはサンティアゴ要塞が位置した（図4）。1583年にはマニラのアウディエンシア<sup>11</sup>設置が認められ、1589年にこのアウディエンシアの廃止がいったん決定したものの、1595年に再設置された（菅谷 1995: 209）。



図 3：イントラムロスを取り囲む城壁。写真左上方が壁の外側で右下方が壁の内側に当たる（2014 年 8 月、筆者撮影）。



図 4：パシグ川沿いのイントラムロス北西端に位置するサンティアゴ要塞（2019 年 12 月、筆者撮影）。

## 2. スペインによる統治とキリスト教化

### (1) 政治的支配

フィリピン総督はアウディエンスアの長官を兼務した。フィリピン総督領 *Capitanía general de Filipinas* は、形式上はヌエバ・エスパーニャ副王領（1535 年設置）に属し、財政面でも絶えず副王領からの援助を受けた<sup>12</sup>。とはいえ、副王都メキシコ市とは太平洋に隔てられていたこと

から、スペイン国王の代理者としての役割を担うフィリピン総督は、現地における世俗の最高権力者として君臨した<sup>13</sup>。

先スペイン期のフィリピンの人々は、血縁的な社会集団であるバラングイ *barangay* を生活の場としていた<sup>14</sup>。スペイン人は、複数のバラングイを統合してプエブロ *pueblo de indios* という単位にまとめようとした。プエブロの中心となるカベセラ（主邑）には、教会・役場・広場が配置され、現地のゴベルナドルシージョ *gobernadorcillo* がカベセラに加えてプエブロに属する集落を統括した（池端 1991: 224-225 ; Phelan 1967 [1959]: 124）<sup>15</sup>。このようにスペイン当局は、メキシコやペルーの先住民に対して行った集住化 *reducción* の経験を踏まえ、円滑にフィリピンの先住民を統治すべく 2400 人～5000 人規模のプエブロを整備していった（Phelan 1967 [1959]: 44）。

フィリピン総督領は、アルカルディア・マヨール *alcaldía mayor* と称される「地方」に分けられ、プエブロはこれら地方の下に置かれた<sup>16</sup>。アルカルデ・マヨールは、フィリピン総督の代理として、各地方の行政・軍事・司法・財政を担った。フィリピン各地には早い段階からスペイン人の町が築かれ、エンコミエンダ制も導入された<sup>17</sup>。ルソン島では、1571 年のマニラに続き、1574 年にビジャ・フェルナンデーナ（ビガン）、1579 年にヌエバ・カセレス（ナガ）、1582 年にヌエバ・セゴビア（ラルロ）が建設された。ビサヤ諸島では、1571 年にサンティシモ・ノンブレ・デ・ヘスス（セブ）、1582 年にアレバロ（イロイロ）が創設された。しかしながら、スペイン人の人口が急激に増加することはなかった。1591 年の時点でマニラのスペイン人の数は 300 人、セブでは 30 人に過ぎなかった。1630 年の時点でマニラに住むスペイン人はわずか 200 人であり、同年のセブ、ヌエバ・カセレス、ヌエバ・セゴビア、アレバロの 4 か所の人口を合計しても 300 人であった（Corpuz 2005: 78）。

フィリピン各地の探検・征服を進め、町を建設したとはいえ、そのことによってスペイン人による支配が容易に広範囲に及んだわけではなかった。ひとたび「平定」した地域でも反乱が長引くことがあった。スペイン人の町ヌエバ・セゴビアを中心都市とし、16 世紀末に 4 万 5000 人の先住民を管轄していたとされるルソン島北部のカガヤン（ヌエバ・セゴビア）地方の場合を例として見ておきたい。この地方では、租税の厳しい徴収が引き金となって 1589 年に抵抗運動が勃発した。また、1607～08 年にはナルフォタンという村で旧来の信仰を守ろうとする人々が逃亡し抵抗した。1621～22 年にはアブアタンでスペイン人への抵抗運動が起き、1625～26 年には居住地の再編に反対する集団が逃亡した。1627～28 年の段階でもカガヤン地方各地の抵抗は続いているとの報告が残されており、1628 年には、2000 人のフィリピン人を従えたスペイン人の遠征隊が 8 つの村を攻撃し焼き払ったという（Corpuz 2005: 138-141）。

## (2) 宗教的支配

スペインによる征服・植民地化は、世俗的な支配だけを目指したものではなく、宗教的な支配の構造と不可分であった。アメリカ大陸各地の征服やそれと並行して進んだフィリピン諸島の征服の目的は、貴金属や香辛料といった現生的利益だけではなく、「異教徒のキリスト教化」という使命によっても支えられていた。それゆえ、アメリカ征服においてしばしば言われるように、武力による征服は「魂の征服」と表裏一体であった<sup>18</sup>。

フィリピンにおけるカトリック布教は、当初から修道会が担った。17世紀以降、スペイン領アメリカでは教区の世俗化が進んで在俗司祭が増加したが、フィリピンでは長らく修道司祭が布教活動を担った。最初に到来したのはアウグスティヌス会で、1565年のレガスピ隊に同行していたウルダネータ自身がアウグスティヌス会士であった。その後、1578年にフランシスコ会、1581年にイエズス会、1508年にドミニコ会、1606年にレコレクト会が布教に着手した (Bernal 1965: 90; Phelan 1967 [1959]: 31-32)<sup>19</sup>。これら修道会は地域ごとに分業して先住民のキリスト教化に当たった。例えば、ルソン島のタガログ語を話す地域では、その大部分がアウグスティヌス会またはフランシスコ会の管轄となった。イエズス会はそのごく一部のみを引き受け、ドミニコ会は、マニラのパリアンに住む中国系住民を担当した (Phelan 1967 [1959]: 49-50)。

スペイン王室がインディアス支配を進める上でしばしば持ち出したのは、国王の教会保護権 *patronato real* であり、スペイン王は聖俗両方の権力を行使した。それゆえ、スペイン王室が導入した統治の組織は、カトリックの教区とも密接に結びついていた。

世俗権力とともに支配の両輪となった教会組織としては、まず 1578 年にメキシコ大司教区に属するマニラ司教区が設置された。1595 年にはマニラ司教区が大司教区に格上げされ、その下に大司教直轄区、ヌエバ・カセレス司教区 (ビコール地方)、ヌエバ・セゴビア司教区 (イロコス地方およびカガヤン地方)、セブ司教区 (ビサヤ地方およびミンダナオ島) が置かれた。各司教区はいくつもの小教区に分かれており、小教区は概ねプエブロと一致していた (菅谷 2001a: 137-138)。時代が下り人口が増加すると、小教区やプエブロが分割されて独立することもあった。

## (3) フィリピンにおけるキリスト教化の特徴

今日、平均的なフィリピンの町村において、訪れた者の目を惹くであろう 3 種類の建造物がある。一つはフィリピーノ [フィリピン人] の家で、しっかりとした木材で支えられ、竹の壁やニッパヤシの葉の屋根で造られているものである。[...] 2 つめのタイプの建造物も目立つものである。それはカトリックの教会で、何世紀も前にスペイン人宣教師の指揮の下で建てられた、装飾の凝らされたバロック

風の構造物であることが多い。そして、第3の建造物は、アメリカによる統治の保護の下で20世紀に建てられた学校の建物である (Phelan 1967 [1959]: vii)<sup>20</sup>。

今から60年ほど前、米国人研究者フェランは『フィリピンのスペイン化』の序文でこのように述べた。21世紀の現在であれば、4種目の建造物として地方にも広がりつつある商業施設もこのリストに加えられるかもしれない。いずれにせよ、スペイン支配下で建てられた教会やその他キリスト教の痕跡は、現在もフィリピン国内の各地で目にすることができる。

修道士たちは、フィリピン以前に征服が進んだアメリカ各地での経験を活かしながら布教を進めることになった。そうした前例として重要だったのは、メキシコでの経験であった。メキシコでは、1521年のアステカ王国征服後、1523年にフランシスコ会が最初の3人を派遣し、翌1524年には12人の使徒団を送り込んだ。ドミニコ会やアウグスティヌス会もこれに続き、前者は1526年に12人から成る伝道団を、後者は1533年に最初の7人を派遣している (Ricard 1985[1947]: 85-86)。アメリカ大陸の中で、メソアメリカ文明とアンデス文明が存在したメキシコやペルーにおいては、とりわけ人口も多く、様々な試みがなされたが、アメリカ大陸で実践された手法はしばしばフィリピンでも採用された。

言語の問題は、そのわかりやすい例の一つだったと言えるだろう。フィリピンの言語は多様であり、セブ島のセブアノ語、ルソン島のマニラ周辺のタガログ語だけでなく、各地方に進出する過程でスペイン人はビコール語、イロカノ語、パンパンガ語など数々の言語に遭遇した。

修道士たちは主要言語の修得やそれら言語を用いての宣教活動に努めた。先住民の改宗化を進める上でとりわけ重要な役割を担ったのは、文法書・語彙集・教理書という3種類の書物だった (Hernández 1998: 38)。手稿のものもちろん存在したが、印刷技術の普及に伴い、それらはより多くの修道士が利用できるようになっていった。

フィリピンで確認されている最初の出版物は、1593年、マニラでの木版印刷によるもので、2冊の教理書 *doctrina* が印刷された。うち1冊は中国語であったとされるが、もう1冊はスペイン語とタガログ語の対訳本である (Wolf 2014)。その後、1604年には同じくマニラのビノンド地区において、ドミニコ会士のフアン・デ・カストロもしくはフランシスコ・ブランカス・デ・サン・ホセによって最初の活版印刷が開始された (Hernández 1998: 3 ; Wolf 2014: 30)<sup>21</sup>。

文法書・語彙集・教理書が最も多く著されたフィリピンの言語は、タガログ語であった。1776年、あるアウグスティヌス会士は、既に20点以上のタガログ語の文法書が存在すると書き記している (Hernández 1998: 39)。タガログ語の文法書の例としては、アンドレス・ベルドゥーゴの『タガログ語文法 *Arte de la lengua tagala*』(1649年刊)、18～19世紀にかけて3つの版を重ねたガスパール・デ・サン・アグスティンの『タガログ語文法の概要 *Compendio del arte de la lengua*



*tagala*』(1703 年刊)、トマス・オルティスの『タガログ語の文法と法則 *Arte y reglas de la lengua tagala*』(1740 年刊)、アグスティン・マリア・デ・カストロの『タガログ語の正書法と法則 *Ortografía y reglas de la lengua tagalog acomodadas a sus caracteres*』(1776 年脱稿)<sup>22</sup> などがある (Hernández 1998: 44-50)。

このような文法書、さらには語彙集や教理書の編纂や出版は、メキシコやその他スペイン領アメリカ諸地域における改宗化の経験を踏まえたものであった。タガログ語以外にセブアノ語、ビサヤ語、イロカノ語、パンパンガ語など複数の主要言語についてもこうした書物が著されたが、このような方針はメソアメリカ地域の場合と同様であった。15 世紀末～16 世紀前半のアメリカ大陸の言語数は無数と言えるほどであった。例えば、200～300 ほどの言語があったと考えられるメソアメリカに目を向けるとナワトル語の他にタラスコ語、サポテコ語、ミシュテカ語、マヤ系諸語(ユカタン・マヤ語、ツェルタル語、ツォツィル語、カクチケル語、キチェ語など)など主要言語がいくつも存在し、それぞれの文法書・語彙集・教理書の編纂が積極的になされている<sup>23</sup>。

教会建築においても、現地事情への適応は修道士たちにとっての課題であった。スペイン式の教会建築を征服地で実現する上で、一定程度、現地の状況に合わせる必要が生じることがあった。例えば、征服後、16 世紀のメキシコでは「屋外礼拝堂 *capilla abierta*」と呼ばれる構造物が教会にしばしば付属しているが、これは、教会の中に入り切れない多数の先住民に基督教の教えを伝えるために不可欠なものであった(図 5)。

フィリピンの場合、熱帯性の気候や自然災害への対応が不可欠であった。フィリピンの教会には身廊の左右に窓や扉などの開口部が目立つものが多いが、これは高温多湿な気候ゆえに風通しをよくする目的があったと思われる(図 6)。また、教会建築にとって地震への対策は重要



図 5：メキシコ州トラルマナルコの屋外礼拝堂(2017 年 8 月、筆者撮影)。





図 6：セブ島南部のボルホオン教会（2014 年 8 月、筆者撮影）。



図 7：マニラ大聖堂（2014 年 8 月、筆者撮影）。

であった。例えば、マニラ大聖堂は、当初はニッパヤシや竹といった「軽素材」で建築されたが、1591 年に石造となって以降、繰り返し地震の被害を受けており、現在の建物は 8 代目である（図 7）。

地震被害の脅威は、フィリピンの教会建築の様式に影響を与えた。イロコス地方<sup>24</sup>で 18 世紀初頭に建造されたパオアイ教会は、ガレンデによれば「バロックでもゴシックでもない、ヨーロッパ風でもメキシコ風でもない、正真正銘フィリピーノな」建築の例である（Galende 1996: 263；図 8）。この教会の両側には厚みのある側壁が並び、ファサードの側壁に相当する部分には「中国風の雲」（渦巻き状の模様）が見られる。美術史家の中には、側壁を備えたこの建築を



図 8：イロコス・ノルテ州のパオアイ教会（2019 年 12 月、筆者撮影）。

「地震バロック earthquake Baroque」と呼ぶ者もある（Galende 262）。

3 世紀以上にわたるスペイン植民地時代を経て、現在もフィリピン国民の 8 割以上がカトリック信者とされる。とはいえ、「魂の征服」の過程におけるキリスト教信仰のあり方も、メキシコやその他のスペイン領アメリカ各地と同様に曖昧さを含んだものであったと思われる<sup>25</sup>。

サント・ニーニョ（幼子イエス）は、フィリピン各地で今も篤い信仰を集めている（図 9）。この幼子イエス像の信仰は、マガリャンイス一行のセブ到来時に地元首長の妻に贈呈された幼子イエス像が 40 年以上後のレガスピ遠征隊による征服時に「再発見」されたのが始まりとされる。サント・ニーニョは、セブで多大な信仰を集め、「これまでも、そして現在もとりわけ出産

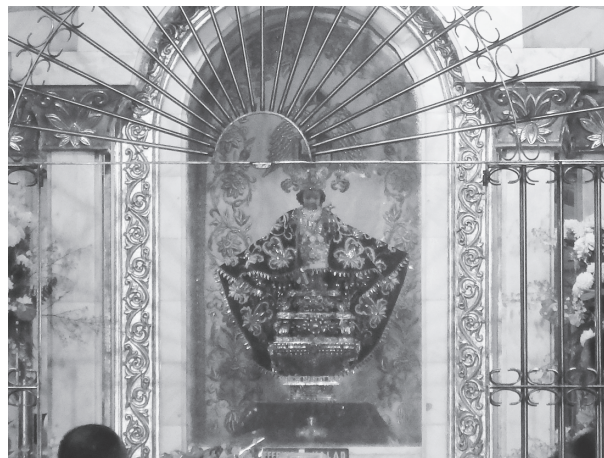


図 9：セブ市内サント・ニーニョ寺院の幼子イエス像（2017 年 9 月、筆者撮影）。

に際して数々の奇蹟を起こしている」と 17 世紀初頭のイエズス会士の記録者チリーノは書き残している (Chirino 1890: 9-10)。

成人キリスト像ではなく幼児姿のキリスト像であるサント・ニーニョが絶大な崇拝を得るに至ったのは、先スペイン期の現地の人々の信仰との整合性を何らかの形で持っていたからなのかもしれない。カトリックの修道士たちは「異教崇拝」を排除し「正しい信仰」を植えつけようとした。しかしながら、例えば先スペイン期に「偶像」(アニート)を各家庭に置いていた習慣は、現在も家庭や商店に見られるサント・ニーニョ像に部分的に引き継がれたとも考え得る。

フィリピンでのシンクレティックな現象について、メキシコのグアダルーペの聖母信仰に匹敵するようなものはなかったものの、フィリピン先住民の「奇蹟」信仰は歯止めがきかなかったという指摘もなされている (Phelan 1967 [1959]: 79)。前述のチリーノの記録には、サント・ニーニョ以外の奇蹟についても複数の描写がある。例えば、マニラでは、先住民がバギオと呼ぶ台風の際に聖女ポテンシアーナ出現の奇蹟が起きたという (Chirino 1890: 11-12)。

このように、フィリピンでは、現地の事情にあわせた建築面での適応がなされ、おそらくはシンクレティックな現象を時として含みつつキリスト教化が進められた。こうした適応や現象は、メキシコなどのスペイン領アメリカでなされた改宗化と重なり合う部分があったと言えるだろう。

### 3. 「スペイン」からフィリピンへの文化の移入

スペインによる征服以降、宗教以外の面でも様々な事物がフィリピンに伝わった。それらを網羅することは、本稿の筆者の力量では及ばないが、ここでは、「スペイン」文化がフィリピンに移入された経緯に関して、言語にかかわる側面を簡潔に見ておきたい。

太平洋を往来する「ガレオン貿易」の成立によって、様々な事物が大海の東西を行き交うことになった。旧大陸(ヨーロッパ・アフリカ・アジア)と新大陸(南北アメリカ)の間で様々な「交換」<sup>26</sup>が進んだのは、1492年のコロンブスの航海以降のことであったが、ガレオン船を用いたマニラーアカプルコ間の交易の開始は、そうした「交換」をさらに地球規模に拡大するものであった。歴史学者フリンが述べているように、ガレオン貿易の開始こそが真のグローバル化の始まりであった (フリン 2010)<sup>27</sup>。

フィリピンには、このルートを通じてスペイン由来の様々なものがもたらされた。食文化はその例の一つだと言えるだろう。フィリピンの諸言語にはスペイン語由来の借用語が数多く見られるが、食文化に目を向けると、現在に至るまでフィリピンにはスペイン由来の料理名が実

に多く存在する。フィリピン料理には、アドーボ *adobo*、トシーノ *tocino*、レチョン *lechon*、ロングアニサ *longganisa*、ガンバス *gambas* などスペイン語由来の料理名は数知れない<sup>28</sup>。これらの多くは、ガレオン船で太平洋を渡ったスペイン人がもたらしたものであろう。

では、実際にガレオン船ではどのようなものが運ばれたのであろうか。マニラーアカプルコ間貿易では、アジアからメキシコにもたらされた様々な産品（例えば、絹製品、象牙製品、陶磁器など）が注目されがちである。また、フィリピンからアメリカ大陸にもたらされたものの中には、メキシコ人の食生活にすっかり根づいたタマリンドや、もはやそれなしには現在のメキシコの海岸の光景は想像しがたいココヤシのようなものも含まれる。一方、アカプルコからマニラに向かうガレオン船については、積み荷の 95 パーセント以上が銀だったとされるが、わずかながらも銀以外の様々なものも運ばれたことがわかっている。ジュステによれば、主にオアハカ産のコチニール<sup>29</sup>、主にプエブラで生産された石鹼といったフィリピンでの需要の高い品であった（Yuste 1992: 104）。

しかしながら、具体的な植物種などのフィリピンへの流入がいつどのような形で起こったのかを検証することは、史料の制約もありしばしば困難である。例えば、カカオ、タバコ、サトウキビなどがフィリピンにもたらされたとされるが、これらのうちカカオとタバコはアメリカ大陸原産のものであった（Bernal 1965: 115）。同じくアメリカ大陸原産のサツマイモも何らかの形でフィリピンにもたらされたが、サツマイモは伝播についての歴史的検証が難しいことをよく表す例でもある。

サツマイモはポリネシアやニュージーランドでヨーロッパ人との接触以前にすでに栽培されていたがアジアには伝わっていなかったとされる。新大陸へ進出したスペイン人は 15 世紀末にカリブ海でサツマイモに出遭い、これを同地の先住民語であるタイノ語由来の「バタータ *batata*」という語で呼んだ。しかし、16 世紀前半にメキシコに支配が及ぶに至り、ナワトル語起源の「カモーテ *camote*」という語がバタータに置き換わり、メキシコのスペイン人にとってはカモーテの方が馴染みのある語となっていった。16 世紀のスペイン人の記録には、フィリピンの「カモーテ」に言及しているものがある（モルガ 1965: 103, 306）。だが、そうした記述がサツマイモを指すのかタロイモなど別のイモ類を指すのかははっきりしない。スコットはトウモロコシやカカオと同様にサツマイモもマニラ征服後に伝わった可能性が高いと述べているものの、結局のところ、文書史料からは確実なことはわからない（Scott 1994: 42）。

このように、実際の物の移動がどのように起こったのかを歴史的に検証することはしばしば困難である。とはいえ、先スペイン期フィリピンに存在しなかったいかなる事物が流入したのかを知る上で、現地にどのような語彙がもたらされたのかは参考になる。加えて、そうした語彙を参照することは、「スペイン文化」の移入の実態の把握にヒントを与えてくれる。

ここでは、18 世紀半ばに作成されたイエズス会士ノセーダとサンルカル『タガログ語語彙集 *Vocabulario de la lengua tagala*』から語彙を拾い出してみた (Noceda at Sanlucar 2013)<sup>30</sup>。スペイン影響下のタガログ語に見られる借用語は、大きく 4 種類に分類することができる。

まず、本来的なスペイン語の単語からの借用である。例としては、*baras* (*vara* 杖) や *damas* (*dama* 婦人) あるいは *hasta* (*asta* 槍の柄) などの一般名詞が見られる。さらに、一見するとスペイン語の単語とはいくぶん語形が変化しているものの、元のスペイン語と同じ意味で使われている語彙もある。例としては、*pista* (*fiesta* 祭り)、*sacharon* (*chicharón* 豚の皮を揚げたもの)、*sabon* (*jabón* 石鹸、スペイン語の古形では *xabón* 石鹸) といった語が見られる。

次に、スペイン語の単語が、元の意味とは別の植物などを指すのに使われているケースも散見される。この辞書に挙げられている語彙としては、*amarillo* (*amarillo* 黄色の)、*angélico* (*angélico* 天使の)、*palo María* (*palo* 棒、*María* マリア)、*San Pablo* (*San Pablo* 聖パウルス)、*Santa Ana* (*Santa Ana* 聖アンナ) などがその例であり、一般名詞もあれば固有名詞もあることがわかる。

第三に、スペインには元来存在しなかった物を指す語、すなわち元々はスペイン語の語彙にはなかったものの、15 世紀末以降に用いられるようになった語が見られる。例えば、*piña* (*piña* パイナップル) は、松 *pino* から派生した語ではあるものの、スペイン人がアメリカ征服で初めて見いだした果物に与えられた名称であった。さらに、*guyaba* (*guayaba* グアバ) は、カリブ先住民が話していたアラワク語に由来する果物名である。

こうした非スペイン語由来の語彙としてとりわけ多く見られるのが、メキシコ先住民語由来の語彙である。そのほとんどがメキシコ中央部 (旧アステカ王国の中心地域) で話されていたナワトル語に由来するものであり、上述の *camote* (*camote* または *batata* サツマイモ) はナワトル語 *camotli* に由来する。同様にナワトル語起源のものとしては、*sico* (*chicozapote* サボジラ、ナワトル語では *tzicotzapotli*)、*sili* (*chile* または *ají* チリトウガラシ、ナワトル語 *chilli*)、*quilites* (*quilit* 薬草、ナワトル語では *quilitl*)、*tiangge* (*tianguis* 定期市、ナワトル語 *tianquiztli*) といった語が見られる。

最後に、アメリカ先住民語に由来する語彙がフィリピンでは異なる意味に用いられた例が見られる。例えば、*atole* (*atole* アトーレ、ナワトル語 *atolli*) は、メキシコでは先スペイン期から存在するトウモロコシ粉を使った飲料を指すが、本語彙集では「小麦粉で作るどろっとしたもの」と説明されている。他にも *tunas* は「マスタードのような果実」と説明があるが、*tuna* はタイン語起源と考えられ、ウチワサボテンの果実 (ナワトル語では *nochtli*) を意味する。おそらくここでは別の果実名に使われているものと思われる。さらに、*acapulco* は「植物の一種」とあるが、これはナワトル語の *acapulco* (「大きな葦の生えている場所」、ガレオン船の到着地の地名でもあった) が何らかの植物の名称に流用されたものと想像される。

フィリピンのみならず、他の太平洋諸島の言語も含めて考察を行ったアルバラによれば、チャヨーテ(chayote ハヤトウリ、ナワトル語 chayutli)は、チャモロ語で chaïoti、ビコール語で sayóte、タガログ語では sayote と言う。カカワテ(cacahuate または cacahuete 落花生、ナワトル語では cacáhuatl)は、チャモロ語では cacaguates、イロカノ語では kawkawati、タガログ語では kakawate という語形で、ペターカ(petaca 箱もしくはケース、ナワトル語 petlacalli)はビコール語、セブアノ語、イロカノ語、パンガシナン語、タガログ語のいずれでも pitáka だという(Albalá 1990: 43)。

これらの語彙は、ナワトル語から直接伝わったのではなく、スペイン語における借用語としての形が伝わったと考えられる。アルバラが挙げているほかの例を見ると、ヒカラ(jícara 器、ナワトル語は xicalli)はチャモロ語やタガログ語で hikara となっている。同じナワトル語起源のティサ(tiza チョーク、ナワトル語 tízatl)は、イロカノ語やタガログ語では tisa、セブアノ語では tisas、パンパンガ語では tisag である(Albalá 1990: 45)<sup>31</sup>。

こうした例からは、ナワトル語から直接にフィリピンの言語に借用されたのではなく、メキシコ由来の借用語を含むスペイン語の語彙がフィリピンに伝わったことがわかる。事実、植民地時代当時のメキシコに住むスペイン系住民の間では、ナワトル語由来の借用語が多く使われていたと考えられる。典型的な例を挙げると、グアチナンゴ(guachinango もしくは huachinango、ナワトル語 cuauhchinanco)は、メキシコのスペイン語ではフエダイ科の魚を指すが、兵士や船乗りなどの「メキシコ人」を指す語として用いられていた(Bernal 1965: 99; サラゴース 1996: 68)。

スペイン植民地時代のフィリピン関係の文書を分析した言語学者のフランコ・フィゲロアによれば、スペイン語文書の中には、次のようなアメリカ先住民語起源の語彙が見られる。タイノ語などカリブ海の言語に由来するものとしては、papaya (パパイヤ)、alcabuco (arcabuco 地面が荒れた)、huracán (ハリケーン)、batata (サツマイモ)、manlar (manglar マングローブ)がある。さらにナワトル語起源のものが多く、上述の petaca (箱、ケース)のような一般的な名詞のほかに、naguatato (nahuatlato 「ナワトル語通訳」が転じて「先住民通訳」の意)、chichimeca (メキシコ北部の「チチメカ人」が転じて「野蛮な先住民」の意)なども見られる(Franco Figueroa 2013: 95)。

以上のように、フィリピンの諸言語に借用されたスペイン語の語彙、フィリピンへ渡航したスペイン人が使用していた語彙には、フィリピンにもたらされた「スペイン文化」の内実が垣間見られる。これらの語彙には相当数のアメリカニスム(アメリカ先住民語に由来するスペイン語の語彙)が含まれており、中でもフィリピンに到来したスペイン人の直接の出発地であったメキシコのナワトル語の影響が特に大きい。言い換えれば、これらの情報は「新大陸の影響

を受けたスペイン文化」がいかにフィリピンにもたらされたかを示唆しているとも言えるだろう。

## おわりに

フィリピンはスペインによって征服・植民地化され、300 年以上の支配を受ける中でスペイン文化の影響を色濃く受けた。しかしながら、ここまで見てきたように、その実態は「スペインの影響」という簡潔な表現では的確に表すことはできない。正確には、フィリピンにはアメリカ大陸を経由したより重層的な「スペイン文化」が届いたと言えるだろう。換言すれば、ヌエバ・エスパーニャ副王領の管轄下に置かれたフィリピンに流入したのは、ある種純粋な「スペイン文化」というよりも、「メキシコに移植されたスペイン文化」もしくは「メキシコを経由したスペイン文化」であった。

フィリピンにおいて支配者となったスペイン人は、確かにスペイン語を話す人々であった<sup>32</sup>。しかし、彼らはしばしばメキシコ特有のスペイン語を使用していた。このことは、タガログ語をはじめフィリピンの諸言語にも影響を与えた。また、宗教面に関して見たように、フィリピンにもたらされた「スペイン文化」の一部としてのキリスト教は、必要に応じて現地への適応を余儀なくされたが、それはメキシコやペルーで起こったのと同じ現象であった。むしろアメリカ大陸での布教経験があったからこそ、一定程度の適応が許容されたのかもしれない。

宗教以外の面においても、フィリピンの現地事情に沿った変容が起こったものと思われる。宗教の場合と同様、受け手側すなわちフィリピン先住民側の習慣や嗜好もある程度反映される余地があったと考えられる。スペインからメキシコへもたらされたスペイン料理には、メソアメリカ特有の産品であるチリトウガラシがしばしば加えられ、辛みの利いた味に変化した。その一方、フィリピンでは、例えばアドーボは酢の風味が主で、辛みはない。チョリーソやロンガニーサといった腸詰肉の場合も、メキシコではチリトウガラシが加えられたが、フィリピンでは甘みのある味付けとなった。言い換えれば、「メキシコ化したスペイン文化」がもたらされた場合にも、フィリピン独自の変容があったと言えるだろう。

以上のように、フィリピンのスペイン化は、同時に「アメリカ化」もしくは「メキシコ化」でもあった。この重層的な歴史過程を明らかにしていくためには、①スペイン文化がアメリカ（とりわけメキシコ）にどう移植され、そこでどう現地適応したのか、②メキシコを発信地として伝えられた「スペイン文化」がフィリピンにどう移植され、フィリピンにおいてどう現地適応をしたのか、という2つの段階を考えておかねばならないだろう。



偏狭なスペイン至上主義でフィリピンのスペイン化を語ることは真実を歪めることになるだろう。「メキシコ人」の影響を過度に強調することも、フィリピンに伝わった文化を解明する上では妨げとなり得る。何より、「メキシコ人」を語るのであればその内実が問われなければならない<sup>33</sup>。スペイン植民地時代にメキシコからフィリピンに渡った人々の中にはイベリア半島出身者もいればメキシコ出身者もいた。一般化するならば、フィリピンの「スペイン化」をもたらした人々は、「メキシコを拠点とするスペイン帝国の成員」であり、「純粋なイベリア半島由来の文化の保持者」とは限らなかった。

本稿では、スペインによるフィリピンの征服・植民地化について見た上で、フィリピンに伝わった「スペイン文化」の重層性を示唆した。今後は、具体的な事例を掘り下げることでその重層性の実態を明らかにすることを課題としたい。

## 注

<sup>1</sup> 「南の海」は、マール・デル・スール  
<sup>1</sup> 「南の海」は、カスティーリャ・イ・オロ地方（現パナマとその周辺）の探検・入植が進む中、1513年に初めて中米地峡の反対側に達したヌニェス・デ・バルボアによって確認された。マガリャンイス一行の航海の際、この海は太平洋 *Océano Pacífico* と名づけられた。

<sup>2</sup> この「世界周航」については、乗組員だったピガフェッタ *Antonio Pigafetta* がクロニカを残している（ピガフェッタ 1965）。

<sup>3</sup> 1525年のロアイーサ遠征隊はスペイン北西部のラ・コルーニャを出航したが、その後のサアベドラ・セロンおよびロペス・デ・ビジャロボスの遠征隊はメキシコから派遣されている。なお、ロペス・デ・ビジャロボスは、遠征先のいくつかの島にスペイン語の名称を与え、マガリャンイスの航海以降、サン・ラサロ諸島 *islas de San Lázaro* と呼ばれていた島々を、当時の皇太子（後のフェリペ2世）に因んでフィリピン諸島 *islas filipinas* と呼んだ（Laorden 2013: 93; Scott 1994: 6）。レガスビによる征服後、一時期は新カスティーリャ王国 *Nuevo Reino de Castilla* という名称も併用されたものの、フィリピナスの呼称は、後から存在が確認されたルソン島なども含めたものとして定着していった（Cabrero Fernández 2004: 113）。

<sup>4</sup> マリアナ諸島およびグアムには、マガリャンイス一行も寄港した。これらの島々はその際に名づけられた泥棒諸島 *islas de los Ladrones* の名で知られていた（ピガフェッタ 1965: 530）。

<sup>5</sup> 現在のセブ市に当たる。レガスビによる「イエスの神聖なる御名」信仰の影響から、1571年にはこの居留地を基礎として、サンティシモ・ノンブレ・デ・ヘスス町 *Villa de Santísimo Nombre de Jesús* が創設された（菅谷 2001b: 21; Cabrero Fernández 2004: 112）。

<sup>6</sup> ウルダネータは、12年間という長期に亘ったロアイーサ探検隊の生存者の一人であった。

<sup>7</sup> これにより「ガレオン貿易」（マニラーアカプルコ間の定期便）が可能となった。この「帰路」は、日本の沿岸で黒潮を利用し、往路よりも北を航行することで可能となった。

<sup>8</sup> マイニラ *Maynila* はタガログ語で「ニラ（藍の一種）が生い茂る地」の意。

<sup>9</sup> アチェはブルネイのスルタンの孫で、スペイン人はこの人物を「ルソン王」と見なした。マイニラの支配は1500年頃に成立したと考えられ、実際にブルネイとの人的・物的交流があった（菅谷 2001b: 32）。

<sup>10</sup> これに対し、壁の外側はエストラムロス *extramuros* と呼ばれた。イントラムロスにはスペイン人が居住するのに対し、エストラムロスにはフィリピン先住民のほか植民地経済において重要かつ不可欠だった中国系住民が住んだ。スペイン当局は、1581～82年に商業センターおよび中国人指定居住区としてパリアンを設置し、1594年にはパシグ川対岸のピノンドに中国人の居住地を与えるなどした（菅谷 2007: 156）。

<sup>11</sup> 元々はカスティーリャ王国に置かれていた司法機関（そのため「高等法院」とも訳される）であり、海外領の統治のためにサント・ドミンゴ（1511年）を皮切りにアメリカ各地に設置され、行政権も付与された。

<sup>12</sup> フィリピン総督領と現在のフィリピン共和国の範囲は異なる。例えばマリアナ諸島やカロリン諸島もその範囲に含まれていた。

<sup>13</sup> メキシコとは基本的に年 1 回のガレオン船の往復便で結ばれていたが、本国スペインの王室はもとより、メキシコの副王との通信にも相応の時間を要した。フィリピンからメキシコへは概ね 1 年で情報が届いていたが、ガレオン船の難破などの理由で途絶える年もあった。フィリピンとスペインの間のやり取りには、最短で 2 年かかったが、返信到着に 5 年が経過した事例もある（清水 2019 : 63 ; 井上 2014 : 23）。

<sup>14</sup> 「船」を意味するバランガイという語は、マガリヤニスー一行も耳にしている（ピガフェッタ 1965:536）。バランガイの長はダトゥと呼ばれ、バランガイとは地理的広がりを持った場所というよりも人間集団を指すものだった（Scott 1994: 5-6）。

<sup>15</sup> カベセラはポブラシオン *población* といい、カベセラに属する他のバランガイはバリオ *barrio* やビシータ *visita* と呼ばれた。

<sup>16</sup> ただし、アルカルディア・マヨールの中には未征服地を管轄するコレヒミエントが置かれる場合もあった。アルカルディア・マヨールの数は 16 世紀末には 12 だったが、時代とともに変化した（Phelan 1967[1959]: 128）。

<sup>17</sup> エンコミエンダ *encomienda* はスペイン語で「委託」を意味し、先住民集団をスペイン人入植者（エンコメンデロ）に付与するもので、カリブ海諸島の入植時に導入された。フィリピンでは 18 世紀まで存続した。

<sup>18</sup> 「魂の征服」は、メキシコの事例を扱ったリカールの古典的研究の書名として知られ、先住民のキリスト教化を指す（Ricard 1985 [1947]）。

<sup>19</sup> セブの場合、1565 年のアウグスティヌス会の後、1595 年にイエズス会、1621 年にレコレクト会が続いた（Fenner 2014 [1985]: 55）。

<sup>20</sup> [ ] 内は本稿の筆者による補足や省略箇所を示す。

<sup>21</sup> この活版印刷の技師はフアン・デ・ベラという中国人キリスト教徒だった。

<sup>22</sup> 1776 年に脱稿したことは分かっているが、出版されたかどうかは不明である。

<sup>23</sup> ナワトル語の場合については、拙稿（井上 2012: 42）を参照。

<sup>24</sup> ルソン島北西部に位置し、19 世紀初頭に北イロコス（現イロコス・ノルテ州）と南イロコス（現イロコス・スール州）に分割された。

<sup>25</sup> メキシコでの布教における既存の信仰のカトリック的要素への置き換えについては、拙稿（井上 2020）を参照されたい。

<sup>26</sup> 「交換」は、米国の人類学者 A・クロスビーの研究書『コロンブスの交換』により普及した用語である（Crosby 2003[1972]）。ただし、この「交換」は、支配—被支配という力関係を伴うものであったことから、不平等な交換であり、「略奪」や「強制」と表現した方が適切な側面を多分に含んでいた。

<sup>27</sup> この見解に対し、大西洋を挟んだ交易の成立がグローバル化の始まりだったとする論者もいる。本稿の筆者は、主に東方へ進出したポルトガル人と、主に西方へ進出したスペイン人の支配が近接し、中国や日本を巻き込んだ段階こそが真の意味で地球規模のつながりの端緒であり、それゆえブリンの見方は正鵠を射ていると考える。

<sup>28</sup> アドーボは肉などを漬け込んでから調理した料理。トシーノは「ベーコン」を意味するスペイン語だが、フィリピンでは豚肉を調理した別種の料理名である。レチョンはスペイン語で「子豚」を意味するが、現在のフィリピンでは鶏肉のレチョン（*lechon manok*）なども存在する。ロンガニーサは「細長い形状の腸詰」、ガンバ（複数形ガンパス）は「エビ」である。

<sup>29</sup> コチニール色素の原料となる昆虫のコチニールカイガラムシ（胭脂虫）。アメリカ大陸では先スペイン期から使用されており、メキシコにおいてはアステカ王国への貢納品でもあった。

<sup>30</sup> ノセダとサンルカル語彙集については、1860 年の再版に基づいて 2013 年に出版された版を使用した。

<sup>31</sup> この *tiza* という語は、スペイン語圏で広く用いられるようになったにもかかわらず、現在のメキシコではラテン語起源の *gis* が一般的である。

<sup>32</sup> 船員などとしてメキシコ先住民（例えばナワトル語を話す人々）もフィリピンに渡航したであろうが、本稿で見たように、ナワトル語の語彙は基本的にスペイン語経由でフィリピンにもたらされたものだった。

<sup>33</sup> クリオーリオ（現地出身のスペイン人）の「アメリカ人意識」や「愛国主義」は、スペイン植民地時代を通じて形成されていったとされるが、「メキシコ国民」としての意識が形作られるのは 19 世紀前半の独立以降である。また、21 世紀を迎えたメキシコは「複文化の国」を標榜しており、20 世紀に一般化した「メスティソ」を掲げる国民像も変容しつつある。

謝辞：本稿は、2019 年度専修大学人文科学研究所総合研究調査、および JSPS 科研費・基盤研究 (B)「イスパノアジアとしてのフィリピン諸島：物質資料と文献資料によるメキシコとの比

較史」(JP19H01300, 研究代表者: 立岩礼子) の研究成果の一部である。

## 参考文献

(邦文)

池端雪浦

- 1991 「フィリピンにおける植民地支配とカトリシズム」 石井米雄編『東南アジアの歴史』、弘文堂(講座東南アジア学 4)、217～242 頁。

井上幸孝

- 2012 「植民地時代メキシコにおける西洋文化の導入とナワトル語訳『イソップ寓話』」『人文科学年報』第 42 号、専修大学人文科学研究所、35～60 頁。
- 2014 「ヌエバ・エスパーニャの先住民記録に見る日本とアジア——チマルパインの『日記』を中心に——」『スペイン史研究』第 28 号、20～27 頁。
- 2020 「メキシコにおけるカトリシズム、聖ヤコブ、聖地巡礼」『四国遍路と世界の巡礼』第 5 号、愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センター、55～64 頁。

サラゴース, ラモン・マリア

- 1996 『マニラ 都市の歴史』西村幸夫監修、城所哲夫・木田健一訳、学芸出版社。

清水有子

- 2019 「スペイン帝国の文書ネットワーク・システムとフィリピン——インディアス総合文書館所蔵フィリピン総督文書の検討」 吉江貴文編『近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク』、悠書館、55～75 頁。

菅谷成子

- 1995 「フィリピンとメキシコ」 歴史学研究会編『世界史とは何か——多元的世界の接触の転機』、東京大学出版会(講座世界史 1)、203～228 頁。
- 2001a 「スペイン領フィリピンの成立」池端雪浦ほか編『東南アジア近世の成立』、岩波書店(岩波講座 東南アジア史 3)、121～148 頁。
- 2001b 「スペイン植民都市マニラの形成と発展」中西徹・小玉徹・新津晃一編『マニラ』、日本評論社(アジアの大都市 4)、21～47 頁。
- 2007 「スペイン領フィリピンにおける中国人移民社会の変容——異教徒の「他者」からスペイン国王の「臣民」へ——」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』第 22 号、153～174 頁。

ピガフェッタ, アントニオ

- 1965 「マガリャンイス最初の世界一周航海」長南実訳・増田義郎注、『航海の記録』、岩波書店（大航海時代叢書第Ⅰ期第Ⅰ巻）、477～670 頁。

フリン, デニス

- 2010 『グローバル化と銀』秋田茂・西村雄志編、山川出版社。

モルガ, アントニオ・デ・

- 1966 『フィリピン諸島誌』神吉敬三訳・箭内健次訳注、岩波書店（大航海時代叢書第Ⅰ期第Ⅶ巻）。

(欧文)

Albalá, Carmen-Paloma

- 1990 “Nahuatlismos en las islas del Pacífico”, en Ma. Cristina Barrón y Rafael Rodríguez-Ponga (coords.), *La presencia novohispana en el Pacífico insular*, México, Universidad Iberoamericana/Embajada de España en México/Comisión Puebla V Centenario/Pinacoteca Virreinal, pp. 37-46.

Bernal, Rafael

- 1965 *México en Filipinas. Estudio de una transculturación*. México, Universidad Nacional Autónoma de México.

Cabrero Fernández, Leoncio

- 2004 “Miguel López de Legazpi y la conquista de las Filipinas”, en Juan Pérez de Tudela y Bueso (coord.), *En memoria de Miguel López de Legazpi*, Madrid, Real Academia de la Historia, pp. 97-152.

Chirino, Pedro

- 1890 *Relación de las Islas filipinas y de lo que en ellas han trabajado los padres de la Compañía de Jesús*. Manila, Imprenta de D. Esteban Barbás.

Corpus, Onofre D.

- 2005 *The Roots of the Filipino Nation, Volume I*. Quezon City, The University of the Philippines Press.

Crosby, Alfred W.

- 2003 [1972] *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences of 1492*. Westport, Praeger.

Fenner, Bruce L.

- 2014 [1985] *Cebu Under the Spanish Flag (1521-1896): An Economic and Social History*. Cebu City, University of San Carlos Press.

Franco Figueroa, Mariano

2013 *El español de Filipinas. Documentos coloniales*. Cádiz, Universidad de Cádiz.

Hernández, Policarpo F.

1998 *The Augustinians in the Philippines*. Makati, Colegio San Agustin.

Laorden Jiménez, Luis

2013 *Navegantes españoles en el Océano Pacífico. La historia de España en el gran Océano que fue llamado lago español*. Madrid, Taograf.

Los Reyes y Florentino, Isabelo de

1890 *Historia de Ilocos*. Manila, Imprenta de “La Opinión”, 2 tomos.

Galende, Pedro G.

1996 *Angels in Stone: Augustinian Churches in the Philippines*. Manila, San Agustin Museum.

Noceda, Juan de, at Pedro de Sanlucar

2013 *Vocabulario de la lengua tagala*. Virgilio S. Almario, Elvin R. Ebreo, at Anna Maria M. Yglopaz (eds.), Maynila, Komisyon Sa Wikang Filipino.

Phelan, John Leddy

1967 [1959] *The Hispanization of the Philippines: Spanish Aims and Filipino Responses, 1565-1700*. Madison, The University of Wisconsin Press.

Ricard, Robert

1985 [1947] *La conquista espiritual de México. Ensayo sobre el apostolado y los métodos misioneros de las órdenes mendicantes en la Nueva España de 1523-1524 a 1572*. México, Fondo de Cultura Económica.

Santamaría, Francisco J.

1992 [1959] *Diccionario de mejicanismos*. México, Porrúa.

Scott, William Henry

1994 *Barangay: Sixteenth-Century Philippine Culture and History*. Quezon City, Ateneo de Manila University Press.

Wolf, Edwin

2016 *Doctrina Christiana: The First Book Printed in the Philippines, Manila, 1593*. Miami, HardPress.

Yuste, Carmen,

1992 “El galeón en la economía colonial”, en Fernando Benítez, Elías Trabulse, *et al.*, *El Galeón del Pacífico. Acapulco-Manila, 1565-1815*, México, Instituto Guerrerense de Cultura, pp. 91-111.